

「自己中心的な思いではなく、主イエスを迎えよう」

(ルカによる福音書 3:7-18)

救い主を迎える道備えのために、神の言葉がヨハネに降り、洗礼者ヨハネは悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。

「蝮の子らよ、我々の父はアブラハムだなどと思うな。」

ヨハネの強烈な言葉です。これはイスラエルの民に対し、自分たちは選民で、救いが約束されているなどと勘違いしてはならないと迫るものでした。神から離れ、隣人への愛を失っているなら、イスラエルの民であっても例外なく怒りの裁きを受けるのです。人々にとってヨハネの叫びはショックなものでした。しかし、当時のイスラエルは偽メシアや偽預言者が横行するほどに、人々は救いを求めていました。救いを切望する人々にとって、ヨハネの叫びは恵みの告知でもありました。群衆はヨハネに問いました。

「では、わたしたちはどうすればよいのでしょうか。」

この真剣な問いは、ヨハネの裁きの告知によって引き起こされました。裁きは人を恐れさせるものです。しかし、その裁きの告知により、生き方への問いが生まれ、悔い改めに結ばれるなら、それは恵みとなります。裁きと恵みとは、切り離すことができない神さまからプレゼントなのです。

さて、洗礼者ヨハネの強烈な説教を聴き、自分の生き方を反省した人々は、生活の劇的な変革が求められることを予想したでしょう。しかし、ヨハネの答えは拍子抜けするほど平凡でした。

「分け与えなさい」、「規定額以上を取り立てるな」、「ゆするな、自分の給料で満足しなさい」…つまりヨハネは「隣人を大切にすること」を求めたのです。信じることは必ずしも日常を捨てることではありません。そうではなく、自己中心的な生き方から離れて、来るべき救い主を中心に生きることが求められているのです。自分の中の自己中心的な思いを取り除き、そこにイエス様をお迎えするなら、わたしたちは隣人を大切に生きていくことができます。そこにまことの平和が実現するのです。

自分ひとりの救いを求めるのではなく、隣人と共に、神さまによる救いを待ち望むのが神の民です。まことの救い主を迎えるため、自己中心的な思いから離れ、来るべき日に備えましょう。